

第三十六話

平成二十九年 十月六日

「焼入れ」が日本人を誕生させた

しけた飲み屋から河岸 {かし} を変えて「落語」へ出向いた。いや高座ではない、講座。「落語とは何か」

最後に講師が「質問のある方……」。で、手を挙げた。

下々の粹 {いき・すい} や気風 {きっぷ} は武家への対抗文化、カウンターカルチャーとして生まれたのではないか。

「はい、そうです。」と、講師。

酔いが回っていたので、そのつづきの自説を披露するのを忘れた。

革命でない対抗文化が取って代わるのが日本文明の粹だと。

夜風に吹かれて、満月まであと6日のお月さまを眺めながら家路につく。

本日（6日）は満月。

月光は饒舌である。雨雲で月見は出来ぬとも耳を澄ませば聴こえる。

ハルキでなく、なぜカズオだったか。

一陣の風の新党が来年にはこうなっている。

東京に水爆が落とされたらどうなるか。

月光は饒舌である。

千年前の出来事さへしゃべりまくる。

刀鍛冶の「焼入れ」と云う[物の理]が人々の心棒の胸を張らせた。日ノ本人を誕生させた。天皇誕生よりずっとあとのこと。